

劇的演出で血通わす

上演続く「海賊」



NBAバレエ団が久保絃一芸術監督による「海賊」全2幕を東京文化会館で初演した。「決定版のない古典」と呼ばれる作品に大なたをふるい、血湧き肉躍り心も震える群像劇に。劇的な演出に客席は沸き返った。

知名度が高く、上演頻度は低い、特異な作品だ。荒くれた海賊、ハーレムにとらわれる美女……。バイロンの詩に想を得た冒険活劇だが、改訂に次ぐ改訂で物語が混乱し、收拾のつかない難物になった。表題が知られているのは、パ・ド・ドゥ（男女の踊り）が技巧の宝庫として独立し、コンサートやコンクールで好まれてきたからだ。しかしその男女は本来、恋人同士ではないというからややこしい。主役は海賊の首領コンラッドと、恋人のメドラー。だがある

時、超絶技巧を誇る（恐らくは小柄な）男性舞踊手のために奴隷のアリ役が追加され、最大の見せ場はパ・ド・トロワ（3人の踊り）に。やがてコンラッドの方が切り捨てられ、メドラーとアリという主従の変則なパ・ド・ドゥになり、名作と呼ばれてきたのである。

絃余曲折。「誰もが知っているが見たことはない」幽霊船にもたとえられた「海賊」全幕だが、近年は手直しが進む。熊川哲也率いるKバレエカンパニーの定番演目となっているほか、5月にはウィーン国立バレエが芸術監督のマニエル・ルグリ版をもって上陸する。「進境著しい団員たち、特に男性陣を生かせる作品として選んだ」とルグリ。昨今の「海賊」復活は、世界的に男性舞踊手が充実してきたあかしとも言えるだろう。

ややこしい物語にどう筋を通すか。鍵となるのは、アリの処遇だ。ルグリは主役の恋物語に焦点を絞るべく、登場人物からアリを削除。一方、「『海賊』といえばアリ、という客席の期待を裏切りたくはない」と、久保はあえてこの役を生かした。

NBA版の初日は新国立劇場バレエ団からのゲスト、奥村康祐がさっそうと場をさらい、パ・ド・トロワでは女主人への抑えきれない思慕をのぞかせ、第三者が絡む違和感を払拭した。気品に輝くメドラー役の峰岸千晶も見事。ほかのキャストも入魂の演技で心情を立ち上らせ、「幽霊船」に血を通わせた。

劇中では、人々の思惑がぶつかり合って熱を放つ。そのややこしさこそが舞台の妙味なのである。

【斉藤希史子】

NBAバレエ団の「海賊」より、主要3役の踊り。左から峰岸千晶、宮内浩之、奥村康祐
一写真家、吉川幸次郎撮影



次回から毎月第2月曜に掲載